

『武蔵野の』コナラ等の落葉広葉樹林の風景に対する 価値観の形成に文学が与えた影響

竹田 直樹¹⁾

The influence of literature on the formation of values for the landscape of deciduous "Musashino" broad-leaved forests such as *Quercus serrata*

Naoki TAKEDA¹⁾

【Abstract】

In Japan, it is known that the reason for the new value of the landscape of deciduous broad-leaved forests such as *Quercus serrata* was in the literature of the latter half of the Meiji era. However, there is no study that organizes what kind of literary work and what kind of expression formed the values for the landscape of deciduous broad-leaved forests such as *Quercus serrata*. This study clarified this part. As a result, I found expressions related to deciduous broad-leaved forests such as *Quercus serrata* in the following literary works. Ivan Sergeevich Turgenev "The Rendezvous" translated by Futabatei, Shimei (1896), Kunikida, Doppo "Musashino" (1898), Tokutomi, Roka "Shizen to Jinsei" [Nature and man] (1900) "Mimizu no tawagoto" [Ramblings of an earthworm] (1913), Tayama, Katai "Shincha no kaori" [New tea incense] (1909), Shimazaki, Toson "Chikuma Sukecchi" [Chikuma River sketch] (1913). Today, the feeling we feel when we see deciduous broad-leaved forests such as *Quercus serrata* is formed by the above-mentioned literary works, and the background is the influence of Romantic literature that begins in Western Europe.

Key words : thickets, literature, Kunikida

1. はじめに

風景は、客体視して視覚的に知覚した環境にそれを見る人の内面が生成する主観が融合することにより環境の中に立ち現れるのである。だから、内面がなければ、風景もない。この内面と風景の関係については前既報¹⁾において詳しく整理したが、ここで、少しだけ復習したい。

18世紀初頭のヨーロッパにおいて、人々は内面を現実の自己や他者の中に把握するようになり、これにより、現実の環境の中で風景が認識されるようになったのである。16世紀と17世紀においては、内面は文学や絵画や演劇や思想の中に留まっていた、いまだ現実の中には把握されていなかった。そのため、風景も風景画やカメラ・オブスキュラの中に留まっていた。だが、人々が内面を現実（自己）の中に把握した瞬間、風景は現実の環境の中に飛び出し立ち現れた。それは、ヨーロッパにおいては、凡そ1710年代から1730年代にかけての出来事であり、日本では、明治20年代（1887～96）の出来事だった。

さて、本論では、上記に関わるエピソードの一つと

して、日本におけるコナラ等の落葉広葉樹林の風景の受容について話題にしたい。

雑木林や二次林などと呼ばれる身近な生活空間の近くに所在することの多いコナラ等の落葉広葉樹林は、植生遷移の過程で出現するものであり、生活に必要な下草や常緑樹などを伐採するなど日常的な関わりの中で、継続性を持って維持されてきたものである。薪炭林という言葉があるように、木材が燃料として利用され、落ち葉は肥料となり、生活になくはならない林だった。しかし、化石燃料や化学肥料の登場により、コナラ等の落葉広葉樹林が本来の役割を果たすことはすでにない。

今日、コナラ等の落葉広葉樹林は、大都市近郊に存在する身近な貴重な自然として認識されている。レクリエーションや環境教育、景観形成や環境保全などの観点からその価値が見直され、緑地保全地区や風致地区など様々な都市計画制度や条例が適用され、あるいは都市公園化されるなど法的に保全されるコナラ等の落葉広葉樹林も多く、都市に暮らす多くの人々に身近な自然とのふれあいの場として親しまれ愛されている。

1) 兵庫県立淡路景観園芸学校

HYOGO PREFECTURAL AWAJI LANDSCAPE PLANNING & HORTICULTURE ACADEMY

戦後、大都市の郊外で育った人は、今日大きな人口的比重を占めているのだが、彼らにとってコナラ等の落葉広葉樹林は、子供のころカブトムシやクワガタムシを探し、林間を散策した馴染み深く愛すべき林であり、それゆえコナラ等の落葉広葉樹林の風景をなつかしいものとして感じる人は多いと思う。とりわけ、東日本でその傾向は強いはずだ。宮崎駿（1941 - ）監督による1988（昭和63）年のアニメ映画作品『となりのトトロ』は、昭和30年代（1955～64）初頭のコナラ等の落葉広葉樹林の広がる里山の風景を叙情性豊かに表現し大ヒットしたのであった。

コナラ等の落葉広葉樹林の風景に対する価値観は、日本に古くからあり、万葉集に数多くの歌が詠まれている。たとえば、次のようなものがある。

「秋山に、^{もみぢ}黄葉木の葉の、うつりなば、さらにや秋を、見まく^ほ欲りせむ」山部王

ここで、紅葉ではなく黄葉という語が使用されていることから、これは推測ではあるが、イロハモミジやヤマモミジなどのカエデ属ではなく、本論が対象にしているコナラ等の落葉広葉樹林が観賞の対象になっていることがわかる。もちろんこれは、今日の私たちが感じている風景として観賞されていたのではなく、環境の中に展開する一つの見えとしてとらえられていたのだが。しかし、1900年前後に、こうした従前のコナラ等の落葉広葉樹林に対する価値観とは全く異なる新たな価値観が生じたのである。それは、中国から導入された「松竹梅」の松林、竹林、梅林に対する価値観とも全く性質が異なるもので、ヨーロッパからもたらされたものであった。

コナラ等の落葉広葉樹林の風景に対する新たな価値観が生じたきっかけは、山根ら²⁾が指摘するように明治時代後半の文学にあることが知られている。しかし、どのような文学作品のどのような表現がコナラ等の落葉広葉樹林の風景に対する新たな価値観を形成したのか整理されたものがない。本研究はこの部分を明らかにしたものである。コナラ等の落葉広葉樹林と文学に関わる学術研究には、山根ら²⁾と岡島³⁾による研究があるが、どちらも具体的に問題となる文学作品の表現箇所を示すものではない。前者は、武蔵野の景観のイメージの変遷の把握を目的としつつ、国木田独歩らの小説におけるコナラ等の落葉広葉樹林の描写が、「新しい武蔵野のイメージを大衆に広める役割を果たした」としている。後者は、雑木の庭の発祥の解明を目的としつつ、日本の近代文学作品において、「雑木林」と「雑木」の語が使用された作品を抽出している。

2. 対象となる文学作品

2.1 イワン・ツルゲーネフの『あいびき』

その最初のきっかけは、ロシアの文豪イワン・ツル

ゲーネフ（1818 - 83）の『獵人日記』の中に収められ1852年に刊行された短編小説『あいびき』が、二葉亭四迷（1864 - 1909）により1896（明治29）年に、翻訳出版されたことがある。その冒頭部分を下記に引用するが、この部分がきわめて重要なのだ。

秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま燦かな日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合い。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄みて伶俐し気に見える人の眼のごとくに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌りでもなかったが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語の声であった。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝った。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のようなすが間断なく移り変った。あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、隈なくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散り布いた、細かな、落ち葉はにわかに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような『ペアポロトニク』（蕨の類い）のみごとな茎、しかも熟えすぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

あるいはまたあたり一面にわかに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ったままでまだ日の眼に逢わぬ雪のように、白くおほろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するようにパラパラと降って通った。樺の木の葉はいちじるしく光沢は褪めていてもさすがになお青かった、がただそちこちに立つ稚木のみはすべて赤くも黄ろくも色づいて、おりおり日の光りが今ま雨に濡れたばかりの細枝の繁味を漏れて滑りながらに脱けてくるのをあびては、キラキラときらめいていた。⁴⁾

ちなみに、^{カバ}樺とは、カバノキ科の樹木の総称で、シラカンバやダケカンバのことである。

『あいびき』は、はかない恋愛の顛末とそれをめぐる感情の繊細な推移をモスクワ郊外のシラカバ林の描写を通して見事に表現した。二葉亭訳の冒頭には、徳富蘆花（1868 - 1927）の依頼により翻訳したものとされており、この訳はその内容とともに斬新な文体が

当時の文学界を大きく驚かせたことが知られている。

加藤百合⁵⁾は、田山花袋(1872 - 1930)による「句読の短い、曲折の多い、天然を描いた文章(『近代の文章』)」という賞賛を紹介した上で、上記の一文は、現在もロシアの小学1年生の国語教科書で暗唱教材になっているとりわけ美しい文章であり、二葉亭はロシア語原文のその美しさを日本語の中に的確に表現していると評価する。

二葉亭訳『あいびき』は、当時の文学界にひとつのショックをあたえ、それは、日本文学に自然主義という新たな流れをもたらすこととなる。

2.2 国木田独歩の『武蔵野』

国木田独歩(1871 - 1908)は、2年後の1898(明治31)年に『武蔵野』を刊行する。その中で、国木田は「元来日本人はこれまで檜の類いの落葉林の美をあまり知らなかったようである。林といえはおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも檜林の奥で時雨を聞くというようなことは見あたらない」とした上で、二葉亭訳『あいびき』の先に示した部分を引用し、「自分がかかると落葉林の趣きを解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は檜の木、植物帯からいうとはなはだ異なっているが落葉林の趣は同じことである」とした。ちなみに、^{ナラ}檜とは、ブナ科コナラ属の樹木のうち、落葉性の広葉樹の総称で、クヌギ、コナラ、ミズナラ、カシワなどのことである。

そして、武蔵野のコナラ等の落葉広葉樹林について次のように絶賛した。

檜の類いだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ちつくせば、数十里の区域にわたる林が一時に裸体になって、蒼ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気がいちだん澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適っているだろう。秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかた遠く響く音。⁶⁾

ただし、国木田はこの段階では「落葉林」という用語を用い、数年後から頻繁に用いられるようになる「雑木林」は使用しなかった。武蔵野台地は、関東平野西部の荒川と多摩川に挟まれた地域に広がり、東京特別区の西半分と北多摩および西多摩地域の一部、そ

して埼玉県南部の所沢市、狭山市、川越市などが含まれる。当時、田畑が広がる渋谷に暮らしていた20歳代後半の国木田は、多摩地域や埼玉南部地域をくまなく散策し『武蔵野』を執筆したのだが、この作品は、今日の「武蔵野=コナラ等の落葉広葉樹林」というイメージの形成に決定的な貢献を果たすこととなる。

2.3 徳富蘆花の『自然と人生』『みみずのたはこと』

徳富は、1900(明治33)年に『自然と人生』を刊行し、その中で次のようにコナラ等の落葉広葉樹林を賛美した。

余は斯雜木林を愛す。木は檜、樺、榛、栗、櫨など、猶多かる可し。大木稀にして、多くは切株より簇生せる若木なり。下ばへは大抵綺麗に払ひあり、稀に赤松黒松の挺前林より秀でて、翠蓋を碧空に翳すあり。霜落ちて、大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨まず。其葉落ち尽して、寒林の千万枝簇々として寒空をさすも可。日落ちて煙地に満ち、林梢の空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可。春来りて、淡褐、淡緑、淡紅、淡紫、嫩黄など和らかなる色の限りを尽せる新芽をつくる時は、何ぞ独り桜花に狂せむや。⁷⁾

ちなみに、^{ハシバミ}榛とはカバノキ科の落葉低木ハシバミのことであり、^{ハゼノキ}櫨とは、ウルシ科の落葉小高木ハゼノキのこと。楓は江戸時代中期に中国から渡来したマンサク科の落葉高木である。

そして、「雑木林」の語は、ここから定着が始まると考えられている。このことについて足田輝一⁸⁾は、江戸時代の地理学者、古川古松軒(1726 - 1807)が1794(寛政6)年に書いた文献の中に「雑木林」の語が認められるものの、江戸時代以前の文芸・詩歌の中に「雑木林」の語は見つけられず、1899(明治32)年の『東京風俗誌』にある「薪は樺・檜等を堅木といい、栗・桜等を雑木という」などの記述から、当時、「雑木林」は観賞の対象ではあり得なかったとする。その上で、足田は、「雑木林」の語を観賞の対象として用いたのは徳富が最初であろうとしている。

さらに徳富は、1906(明治39)年には、現在の世田谷区内の千歳村粕谷へ転居し、当時は鉄道(京王線)もまだ敷設されていなかったこの地で、農作業にいそしみながら、その生活ぶりを書き始め、1913(大正2)年に『みみずのたはこと』を刊行する。

その中で武蔵野のコナラ等の落葉広葉樹林を次のように再び絶賛する。

彼等が東京から越して来た時、麦はまだ六七寸、雲雀の歌も洩りがちで、赤裸な雑木林の梢から真白な富士を見て居た武蔵野は、裸から若葉、若葉から青葉、

青葉から五彩美しい秋の錦となり、移り変る自然の面影は、其日々其月々の趣を、初めて落着いて田舎に住む彼等の眼の前に巻物の如くのべて見せた。⁹⁾

2.4 田山花袋の『新茶のかおり』

田山は、1909 (明治42) 年、雑誌『中学世界』に、短編小説『新茶のかおり』を発表し、その中で、武蔵野のコナラ等の落葉広葉樹林について次のように描写した。

散歩には此頃は好時節である。初夏の武蔵野は榉林、檜の林、その若葉が日に光って、下草の中にはボケやシドメが赤い花をちらちら見せて居る。林を縁取った畑には、もう丈高くなった麦が浪を打って、処々に白い波頭を靡かして居る。麦の畑でない処には、蚕豆、さや豌豆、午莠の樹になったものに、丸い棘のある実が生って居るのを、前に歩いて行った友に、人知れず採って打付けて遣ったり何かすると、友は振返って、それと知って、負けぬ気になって、暫く互に打付けこをするのも一興である。路はやがて榉樹の林に入って、うねうねと曲って行く。¹⁰⁾

ちなみに、シドメはボケと同属のバラ科の落葉低木クサボケのこと。蚕豆はソラマメ、午莠 (正しくは牛莠) はゴボウ。穉樹とは、「穉」を簡略化した文字が「稚」であり、「若い樹木」を意味し、「穉樹の林」ということは、鬱蒼とした深い森ではなく、若い樹木により構成される明るい林を意味している。

2.5 島崎藤村の『千曲川のスケッチ』

島崎藤村 (1872-1943) は、1913 (大正2) 年に刊行した『千曲川のスケッチ』において、長野県内のシラカバ等の落葉広葉樹林について次のように描写する。

白樺の下葉は最早落ちていた。枯葉や草のそよぐ音——殊に榎の葉の鳴る音を聞くと、風の寒い、日の熱い高原の上を旅することを思わせる。『まぐそ鷹』というが八つが岳の方の空に飛んでいるのも見た。私達はところどころにある茶色な榎の木立をも見て通った。それが遠い灰色の雲なぞを背景にして立つさまは、何んとなく茫漠とした感じを与える。原にある一筋の細い道の傍には、紫色に咲いた花もあった。T君に聞くと、それは松虫草とか言った。この辺は古い戦場の跡でもあって、往昔海の口の城主が甲州の武士と戦って、戦死したと言伝えられる場所もある。¹¹⁾

ちなみに、松虫草マツムシソウとは、山地草原に自生するマツムシソウ科の多年草で、初秋に淡い青紫色の美しい花を咲かせる。

3. 文学と美術のシンクロ

以上の文学のムーブメントは美術ともシンクロしていた。岡島³⁾は、この時期に描かれた武蔵野周辺のコナラ等の落葉広葉樹林をモチーフにしたと推測される絵画として、1909 (明治42) 年の菱田春草 (1874 - 1911) による『落葉』、1913 (大正2) 年の川合玉堂 (1873 - 1957) による『雑木山』などを代表例としてあげている。足田は、菱田の『落葉』について「それまでの日本画の世界では、クヌギ林などというものは、画題にはなり得なかったのではないか」とする。

こうして、大正時代になると、コナラ等の落葉広葉樹林は、万葉の時代から連綿と続いてきた価値観とは異なる、新しい美しさに包まれたものとなり、人々は、初めからそうであったかのように錯覚するようになる。

4. まとめ

以上のように、コナラ等の落葉広葉樹林雑の風景に対する従前とは異なる新しい価値観が生じたきっかけは、ツルゲーネフの『あいびき』にある。ツルゲーネフは『あいびき』が収められた『獵人日記』で、貧しい農奴の生活を描き、農奴制を批判したために逮捕投獄されている。このように本来ツルゲーネフは、農奴解放など政治的なテーマを表現する作家であったのだが、たとえばここで問題にしているシラカバ林につながる自然描写に関しては、西欧のロマン主義文学の影響を強く受けていた。

同様に、前述の国木田、徳富、田山、島崎らもロマン主義文学の大きな影響下にあったのである。国木田は『武蔵野』の中においても、ロマン主義文学を代表する作家のひとりであるイギリスのウィリアム・ワーズワース (1770 - 1850) の詩を引用しているし、1908 (明治41) 年の『早稲田文学』に寄稿した『不可思議なる大自然 (ワーズワースの自然主義と余)』と題する論文では、自らの作風について「基本源は何であるかと自問して、余はワーズワースに想致したのである」¹²⁾ としている。

それでは、万葉の時代から続くコナラ等の落葉広葉樹林の風景に対する従前の価値観と、ロマン主義文学がもたらした新しい価値観はどのように異なるのだろうか。

それは、前に引用した『あいびき』の一節にわかりやすく典型的に現れている。

「自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは……」

この一節には、シラカバ林の中で、静かに座って四

方を見渡している「自分」が所在し、その人の内側には、現在の私たちと同じ近代的な自我あるいは内面の存在が感じられる。今日では、あたりまえのことかもしれないが、江戸時代生まれの人が多い1900年前後の人々にとって、それは、これまでとは異なるまったく新しく魅力的で衝撃的なものだったのである。国木田も前に引用したように「自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想すと書いた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。」としている。

つまり、近代の文学作品に描かれた近代的自我すなわち内面が、コナラ等の落葉広葉樹林と結びつき、自らの内側に内面を持つという新たな価値観を生じさせたのだ。

今日、私たちがコナラ等の落葉広葉樹林を見て感じる感覚は、以上のような、経緯を経て、形成された価値観が含まれており、その背景には西欧で始まるロマン主義文学の影響がある。

引用文献

- 1) 竹田直樹 (2016) 柄谷行人 (1941 -) の言説を題材にした「風景の発見」に関する考察, 景観園芸研究, 18, 1-9
- 2) 山根ますみ, 篠原修, 堀繁 (1990) 武蔵野のイメージとその変化要因についての考察, 造園雑誌 53 (5), 216-220
- 3) 岡島直方 (1997) 同時代の文化的背景から見た萌芽期の雑木の庭についての一解釈 - 近代日本文学・絵画と飯田十基の動き, 日本建築学会計画系論文集 62 (500), 79-86
- 4) イワン・ツルゲーネフ, 二葉亭四迷訳 (1969) あいびき, 日本文学全集 1 坪内逍遙・二葉亭四迷集, 集英社, 251
- 5) 加藤百合 (1995) 明治初期露文学翻訳論攷 (一) 二葉亭初期のツルゲーネフ翻訳, つくば国際大学研究紀要 1, 101 - 114
- 6) 国木田独歩 (1967) 武蔵野, 日本文学全集 12 - 国木田独歩・石川啄木集, 集英社, 111
- 7) 徳富蘆花 (1933) 自然と人生, 岩波文庫, 23
- 8) 足田輝一 (1977) 雑木林の博物誌, 新潮選書, 57
- 9) 徳富健次郎 (徳富蘆花) (1938) みみずのたはこと, 岩波文庫, 78
- 10) 田山花袋 (1974) 新茶のかおり, 田山花袋全集第一五巻, 文泉堂書店, 18
- 11) 島崎藤村 (1955) 千曲川のスケッチ, 新潮文庫, 125
- 12) 国木田独歩 (1974) 不可思議なる大自然 (ワーズワースの自然主義と余), 国木田独歩集, 筑摩書房, 254

